

西部劇を撮ったヨーロッパ人 —ターナー、ド・トス、オズワルド

西森 和広

初めに

本誌 27号 (2019) において、ハリウッドで西部劇映画製作に携わった外国出身監督というテーマで十数名程の名前を紹介しました。その中から特にフランス出身のジャック・ターナーへの追記を行うこと、そこでは取り挙げていなかったアンドレ・ド・トスとガード・オズワルドの二人についての記載を行うこと、以上が今回のテーマです。そして特に重要と思われる作品の概説には梗概を付しておきます。

1. ジャック・ターナー Jacques Tourneur (1904-77)

彼の生涯については前回記しましたので、今回は作品についてもう少し詳しい説明をしておきます。ターナーの西部劇は、『インディアン渓谷』 Canyon Passage (ユニヴァーサル 46)、『星を持つ男』 Stars in My Crown (MGM 50)、『草原の追跡』 Way of a Gaucho (20世紀フォックス 52)、『ストレンジャー・オン・ホースバック』 Stranger on Horseback (ユナイテッド・アーティストズ 55)、『法律なき町』 Wichita (アライド・アーティストズ 55)、『硝煙』 Great Day in the Morning (RKO 56) の六篇です。

『インディアン渓谷』

【梗概】 オレゴンの金鉱町ジャクソンヴィルで輸送業を営むローガンは、銀行家の友人ジョージの婚約者ルーシーに惹かれていたが、農夫ベンの娘キャロラインと婚約する。ジョージは賭博で借金を重ね、鉱夫から預かった砂金を支払いに充てていた。ローガンは乱暴者ブラッグに付け狙われていた。ローガンに殺人の現場を見られたと思っていたためだ。砂金を引き出しに来た鉱夫を殺害したジョージはルーシーと結婚して町を出る意志を固める。結婚衣装を買いにサンフランシスコに向かうルーシーに同道したローガンが銃撃される。二人が

町に戻ると、ジョージは鉞夫殺害の罪で捕まっていた。ローガンはジョージを逃がす。折しもブラッグがインディアンの娘を暴行したため部族の蜂起を招き、ベンの家が襲われ、彼と息子が殺される。ローガンらは守備隊を結成。ブラッグが森から助けを求めて逃げて来るが、ローガンは彼を追い払う。ブラッグが殺され、襲撃は収まるが、町もローガンの店も焼き払われた後だった。ジョージはすでに守備隊の手に掛かって死んでいた。農民の生活を望むキャロラインはローガンに別れを告げ、ローガンはルーシーと新しい道を歩む決心をする。

．．．

マーティン・スコセッシが本作は「実際の開拓民たちの町」を描いていると称賛したことは前回は記しました。このリアリズムこそ本作の要であることは間違いありませんが、それを一層活かしているのが、ターナーの「暗示の魔術」(Wilson) を最大限に用いた引き締まった演出にあります。吉田広明が、行方不明のキャロライン探索に関して、残された衣類の切れ端がローガンにもたらず暗示の効果についての見事な分析を行っていますが (pp.430-431)、それ以外にも、ジョージによる鉞夫の殺害、ブラッグのインディアン娘への暴行、そしてジョージの殺害など、いずれも決定的と言えるような事件の瞬間は一切描かれていません。ただそれらは暗示されるだけなのです。それでいて観客は、その「場面」を推測することで、実際に見せられる以上に強い印象を植え付けられるのです。ただ、スーザン・ヘイワード演じるルーシーの婚約者のジョージ役にブライアン・ドンレヴィが配されているのはどうでしょうか。この敵役の名優が相手役では、彼女がいずれ、ダナ・アンドリュース演じるローガンと結ばれるであろうことはあまりにも明白です。

次の『星を持つ男』は准西部劇と呼ぶべき作品です。表題は保安官バッジを指しているように思われるかもしれませんが、原題は「我が王冠の星」といい、主人公の説教師ジョサイアが愛してやまない讃美歌の題名に由来する信仰の象徴なのです。ジョエル・マクリー演じるジョサイアは、南北戦争後、テキサスの田舎町に赴任して来た説教師で、映画は養子となった元孤児の少年の回想として語られます。物語は、ジョサイアの赴任の様子に始まり、彼と妻の生活、

少年との出会い、町の人々との交流、そしてその間に起る様々な出来事や事件が綴られてゆくというものです。クライマックスの、町の古老である黒人農夫を襲うクー・クラックス・クランの衣装に身を包んだ一団に立ち向かうジョシアの姿が印象的です。彼は武器を取るのではなく、団に加わっているだろう者たちに向けて、黒人農夫との昔の思い出を呼び覚ませるという手段に出ます。彼は農夫の遺書と称する実は白紙の文書を手し、安宅の関の弁慶さながらに、各人充てに送られた遺贈品の数々を挙げて行きます（例えば、少年時代に彼から釣りを教わった時に使った釣り竿）。それを聞いた者たちは、一人また一人と立ち去って行くのです。マクリーの親友であったターナーが、本作の脚本を読んで、是非にと自ら監督を引き受けた理由がよく分かる、ヒューマニズムにあふれた佳品です。

『草原の追跡』は、パンパ（大草原）に牛を追うガウチョ（カウボーイ）が主人公の、アルゼンチンで撮られた異色の作品です。古い生き方を守ろうとするガウチョと、「進歩と発展」を盾に彼らを追いたてる政府と軍隊というテーマは、アルゼンチンの国民的叙事詩であるホセ・エルナンデスの『マルティン・フィエロ』の中でも歌われた主題で、やがて一つの潮流となる「黄昏の西部」のテーマを先取りしているようでもあります。また、先住民であるインディオと軍との闘いの様子も描かれていて、近代における先住民との戦いの歴史が合衆国だけのものではなかったことも教えてくれます。そもそもガウチョこそカウボーイの先輩で、「新大陸」における歴史ははるかに古いのです。広大なパンパや雪のアンデスの情景は、おなじみの景色とはまた違った別の魅力にあふれています。ローリー・カルホーン演じる誇り高きガウチョは、最後の最後まで戦い抜こうとしますが、ついに妻と子供のために、泰然として政府の軍門に下ります。彼の姿には滅び行く者の運命が刻み込まれているのですが、どこか明るい未来をも暗示するかのようにも見える不思議な終わりです。

『馬上のよそ者』

【梗概】巡回判事リチャード・ソーンはある町を訪れ、ある殺人事件が正当防衛として処理され、記録も残されていないと知る。殺害者トム之父は地域に君

臨する大牧場主バーナマンだった。判事は、バーナマンの息のかかった者たちの妨害をはねのけ、事件の目撃者である父娘を見つけ、裁判で証言することを約束させる。その一方で、ソーンはバーナマンの姪エイミー・リーと知り合い、親しくなる。しかし彼女は従兄トムの潔白を信じていた。バーナマンの妨害を避けるため、ソーンは別の町で裁判を行うことにして、トムと証人父娘を移送することにする。移送にはエイミー・リーもついて来る。途中、崖上の狭道でトムは証人の父の馬にわざと自分の馬をぶつけて突き落とす。これを眼前にしたエイミー・リーはトムの罪を確信する。バーナマンの一味がソーンらを襲う。するとソーンはあっさりトムを渡して立ち去る。一同が呆気に取られる中、十分に距離を取ってソーンはライフルで銃撃を始める。隙をついてエイミー・リーがトムを乗せた馬を引いて囲みを抜け出して駆け出す。バーナマンは手下に追わせるが、ソーンの銃が彼らを逃さない。ついにバーナマンも降参する。ソーン判事の下、トムの裁判が始まる。

．．．

本作は、低予算の作品ながら、見事な脚本を見事な演出で撮り切った隠れた逸品です。終始ポーカークフェイスで、こともなげに敵の抵抗をかわし、最後は奇抜な逆襲作戦で敵を降参させる巡回判事をマクリーが見事に演じています。バーナマンの手下が嫌がらせに彼に水を引っかけますが、「ありがとう、今日は暑い」と涼しい顔で意に介しません。そうかと思えば、殴りかかる相手を軽くいなして水桶の中に叩き込みます。敵に囲まれたヒーローが、さてどうやって窮地を脱するのかというクライマックスの場面では、何とあっさり引き退がり、背を向けて走り去るのです。これには敵も味方も、そして観客も驚きでしょう。敵は安堵し、味方は落胆、皆の力が抜けたその瞬間、十分距離を取った上でライフルを撃ち掛けるのです。この計算された仕掛けは本当に驚きです。脚本のハーブ・ミードウとドン・マーチンはそれほど知られた作家とは言えませんが、なかなかのものです。ベテランのジョン・キャラダイン（判事に付きまとう弁護士ストーリーター大佐）とジョン・マッキンタイア（バーナマン）、それに若いケヴィン・マッカーシー（トム）が、いずれもしたたかな悪党を演じていい味を出しています。

上映時間六十六分、制作費三十八万ドル。他作品からのフッテージ(撮影シーンの借用も目立つ、完全な「B級」作品ですが、予算ばかり掛けられたA級作品を恥じ入らせるような見事な出来栄です。本作のオリジナルのネガは失われてしまい、イギリス映画協会に残されたプリント版による荒い映像(切れたフィルムをつないだと思われる箇所もある)でしか観ることができないのが残念です。

続く『法律なき町』は、ワイアット・アープが、最初に保安官を務めたという(実は彼は全く保安官になったことはないのですが)ウィチタ時代の活躍を描く、いわばアープ前史の物語です。ターナーの最もオーソドックスな西部劇で、主演はやはりマクリーですが、残念なことに、彼の持ち味である朴訥さや温厚さが、却って本作をもう一つ緊迫感に欠ける作品にしてしまったように思われます。そもそも物語自体がオーソドックス過ぎます。OK牧場の決闘のあっさりした焼き直しといった風で新鮮味が無いのです。それとアープが少々超人的に過ぎる点もどうでしょうか。早撃ちでは誰も敵わない上に、そもそも敵役が役不足です。横暴な牧場主と乱暴者の牧童たち、そして裏で糸を引く町の黒幕というよくある構図ですが、これといった悪役の「顔」がいませんし、何と黒幕役はエドガー・ブキャナンです。その独特のダミ声と身体つきで、顔を見なくてもすぐそれと分かる西部劇の「顔」の一人ですが、むしろコミック・リリーフ役、口こそ達者だが実は臆病な保安官や気の良い老人役などの似合う脇役です。アープに最後の対決を迫る牧童役のロイド・ブリッジスにしても、例えば『真昼の決闘』(52)の保安官補ハーヴェイのような、軽めの憎まれ役の似合う俳優で、ヒーローと対等に渡り合うようなタイプではありません。ボスや同僚たち皆が諦めて町を出て行こうとするのに、彼一人アープに立ち向かおうとします。もちろんボスも止めます。どう見てもアープの敵ではないのです。別に殺さなくても、銃だけ撃ち落として許してあげればと、同情してしまいたくなります。制作のアライド・アーティスツ(旧モノグラム)は、西部劇の制作をがんばって続けたマイナー会社ですが、そのせいではないでしょうが、本作は少し小さくまとめ過ぎたようです。

『硝煙』

【梗概】南北戦争前夜のコロラド、デンヴァーに、ヴァージニア出身の謎の男オーウェン・ペンテコストがやって来る。酒場の女歌手ポストンを味方に付け、酒場と賭博場の主“ジャンボ”との賭けに勝って、店と金鉱の採掘権を手に入れる。彼は掘り出した金の半分を譲渡するという条件で鉱夫を募る。折しも町は、多数の北部出身者と少数の南部出身者との間で一触即発の状態にあった。彼は、金塊の持ち出しに苦慮していた南部人の鉱夫グループに接触し、金塊輸送の話を持ち掛ける。東部から来た女性アン・メリーと親しくするオーウェンに対し、同時期に町にやって来たスティーヴ・カービーは嫉妬する。彼女に恋していたためだが、実は彼は南軍の金塊輸送を阻止すべく派遣された北軍大尉だった。オーウェンは自衛のため射殺してしまった男の息子ゲーリーを引き取って育てる。ついに南北戦争が勃発。北軍部隊がやって来て南部出身者は攻撃を受け始める。オーウェンはゲーリーに、父殺害の事実を告げてポストンに後を委ねると、南部人グループの金塊を馬車に積み込み、北軍の囲みを突破する。ジャンボが嫉妬からポストンを殺害、しかし自身も銃撃戦に巻き込まれて死ぬ。オーウェンは自分の馬車をおとりに使って、追跡隊を引き付け、金塊を積んだ馬車を逃がす。オーウェンはスティーヴに追い詰められるが、愛しているのはポストンとゲーリーだけだと告げると、スティーヴは笑って彼を見逃がす。

．．．

オーウェン（ロバート・スタック）は通常の西部劇の主人公とはだいぶ違います。何者とも語らず、町にやって来るや、見事なカードの腕を見せて、一夜で賭博場を乗っ取ります。次いで、手に入れた鉱山の採掘権を使ってひと儲けを狙います。さらに南部出身者のグループに対しては、高額の報酬での金塊輸送を請け負います。また酒場の女歌手ポストン（ルース・ロマン）と親密になるかと思えば、東部から来た女性アン（ヴァージニア・メイヨ）にも接近します。金儲けと女に目が無い賭博師でしょうか。しかし一方で、心ならずも殺害した男の息子ゲーリー（ドナルド・マクドナルド）の庇護者となり、最後は、金塊輸送を成功させるために報酬も何かも投げ捨てるのです。この主人公オーウェンはいったい何者なのでしょう。何が目的だったのでしょ。行き当たり

ばったりの人生を楽しむ冒険者のようにも見えますし、最後に暗示されるようにやはり南軍将校として密命を帯びて行動していたのでしょうか。クリス・フジワラも指摘するところですが、本作はついに最後まで、あらゆる疑問に明確に答えることなく終わります。最後にオーウェンは「愛していた」というポストンへの伝言を、スティーヴ（アレックス・ニコル）に託します。二人は彼女の死を知りません。スティーヴはやがてそれを知るようになるかもしれませんが、オーウェンが知ることはあるのでしょうか。スティーヴはオーウェンを「南軍のペンテコスト大佐」と呼んで鎌をかけますが、オーウェンは「私用だ」とさらりとかわし、それ以上は何も語りません。そして二人は敬礼を交わして別れるのです。実に何とも言えない余韻だけが残ります。オーウェンが何者だったのかは永久に分かりません。スティーヴの推測したように、やはり軍務だったのでしょうか。それにしても、彼の行動はあまりに偶然とその場の判断に左右され過ぎているように見えます。また結局、金塊は無事南軍の手に渡るのか、それとも北軍が抑えるのかも分かりません。一人残されたゲーリーの行く末も気になります。カービーやアンが庇護者となって、オーウェンの財産を継がせることになれば、ただそう願うばかりです。またやはりフジワラも指摘する通り、本作の原題「グレート・デイ・イン・ザ・モーニング」の意味もよく分かりません。「朝を迎えた偉大な日」といったところでしょうか。誰にとって、どうして偉大なのでしょうか。まさしく最後の最後までターナーの暗示の技に支配された作品と言えそうです。原作はロバート・ハーディ・アンドリュースの小説。脚本はレッサー・サミュエルズです。

2. アンドレ・ド・トス André De Toth (1913-2001)

ハンガリー、ブダペストの南東 200 キロのルーマニア国境近くにある町マコ（当時はオーストリア・ハンガリー帝国領）の出身。生年については、インタビューでも曖昧にはぐらかしてお茶を濁していたのですが、1913 年 5 月 13 日と判明したようです。フランス貴族の血筋を思わせるような名前ですが、元々のハンガリー名は Sásvári Farkasfalvi Tóthfalusi Tóth Endre Antai Mihaly という大変長いものようです。ブダペストの大学では法律を学び、34 年に学位

を得ます。学生時代から劇の脚本を書いて注目され、モルナール・フェレンツの庇護を得ます。その縁もあってやがて映画界に進み、カメラ、脚本から演技まで、様々な経験を積み、ウィーン、ベルリン、ローマや、またアメリカへも幾度か赴いています。イギリスにスタジオを構えた同郷のアレクサンダー・コルダの下で数年の経験を得た後、39年に母国で監督として五本の作品を撮ります。それがコロビアのハリー・コーンの目に留まります。ナチスの脅威が迫る中、40年にアメリカに渡ります。同じくやって来たコルダの作品に協力する一方、コロビアで二本の作品を撮ります。その後はフリーとなり、アカデミー原案賞にノミネートされる（ヘンリー・パウワーズと共同）ヘンリー・キング監督の『拳銃王』(50) など、作家としての仕事も行います。監督としては、西部劇と共に、『肉の蠟人形』(53) のようなミステリー・ホラー、『落とし穴』(48) などのフィルム・ノワール作品で知られます。七度の結婚を経験しますが、その最初が女優ヴェロニカ・レイクでした。2002年10月27日、カリフォルニア州バーバンクで亡くなります。

ド・トスの西部劇は、『復讐の二連銃』Ramrod (ユナイテッド・アーティストズ 47)、『馬上の男』Man in the Saddle (コロビア 51)、『西部のガンベルト』Carson City (ワーナーブラザーズ 52)、『スプリングフィールド銃』Springfield Rifle (同 52)、『廃墟の守備隊』Last of the Comanches (コロビア 53)、『叛逆の用心棒』The Stranger Wore a Gun (同 53)、『平原の落雷』Thunder over the Plains (ワーナーブラザーズ 53)、『勇者の汚名』Riding shotgun (同 54)、『賞金を追う男』The Bounty Hunter (同 54)、『赤い砦』The Indian Fighter (ユナイテッド・アーティストズ 55)、『無法の拳銃』Day of the Outlaw (同 59) の全十一作です。外国出身監督でこれだけの数を手掛けている人は少ないのでは。元々西部劇ファンであったことが大きいのでしょうか。

『復讐の二連銃』

【梗概】 牧場主ベン・ディカソンの娘コニーは、大牧場主フランク・アイヴィーとの結婚を嫌い、彼と対立するウォルト・シップレイと結婚して二人で牧場を経営する計画を立てる。しかしアイヴィーの脅しに屈したウォルトが去り、コ

ニーは、ウォルトが雇っていたデイブ・ナッシュを新たにラムロッド（牧童頭）に雇い、自身で牧場経営に乗り出す。アイヴィーはコニーの牧場を焼き打ちにして諦めさせようとする。デイブは、友人のビル・シェルとその仲間を牧童に加え、アイヴィーの牧童小屋を襲撃して占拠する。その報復で、仲間の一人がアイヴィーの手下に瀕死の重傷を負わされる。デイブは彼を、ビルの元恋人で親しくしているローズの許に運び、手当てを受けさせる。デイブは、仲の良い保安官ジム・クルウに、無法な報復をしないと約束するが、怒ったビルは正当防衛に見せかけてアイヴィーの牧童頭を射殺する。コニーはビルを誘惑し、自分の牛を暴走させ、それをアイヴィーの仕業と見せかけるように仕向ける。コニーの訴えで、牛暴走の罪でアイヴィーの逮捕に向かったクルウが撃たれて死ぬ。アイヴィーは牧童の一人を身代わりにして逃亡させる。牧童を追ったデイブは事の真相を知るが、彼も撃たれて重傷を負う。ローズとビルは、コニーにも場所を教えず、デイブを山中の洞窟に匿う。コニーはビルの跡をつけ、デイブの居場所を見つける。しかし、アイヴィーも彼女の跡をつけていた。アイヴィーの襲撃を受け、ビルがおとりになってデイブを逃がす。ビルは山中に身を潜めて時間を稼ぐが、夜、背後から忍んで来たアイヴィーに撃たれる。逃げ延びたデイブは、コニーに口止めされていた若い牧童から、暴走がコニーの策略だったと聞かされる。デイブはアイヴィーとの一騎打ちに挑んで倒す。デイブはコニーに別れを告げ、ローズの許に帰る。

．．．

原作は西部劇作家として著名なルーク・ショートの作品。本作の魅力は、ド・トスの決してあわてず派手さに流れない落ち着いた演出、名手ラッセル・ハーランの奥行きのある味わい深いモノクロ撮影、そして主人公デイブ・ナッシュの誠実で素朴な西部の男の姿を表出させるジョエル・マクリーの滋味豊かな演技などにあると思います。間違いなく、マクリー西部劇の上位に位置される作品と言えるでしょう。

本作が異色なのは、当時ド・トスの妻であったヴェロニカ・レイクが演じるコニー・ディカソン役の存在です。レイクと言えば、『青い戦慄』（47）を始めとする、アラン・ラッドとのコンビによるフィルム・ノワール作品で演じた、

いわゆる「ファム・ファタル」（運命の女）役で有名です。確かに本作のコニー役などは、彼女以外には考えられないような役と言えます。しかし、このコニーのようなタイプの女性は西部劇においては極めて稀な存在です。確かに彼女は、終始悪漢とは対立し、主人公を味方に付け、彼を助けます。他方、自分自身の利益のためには手段を選ばず、味方を道具のごとくに操り、若い牧童を身体で誘い、肉親の情にも心を動かされません。それは通常、悪女役に割り振られるような振る舞いです。最後は、結局彼女の望んだ通りの結果に到ります。デイブ役がマクリーでなければ、フィルム・ノワール作品になってもおかしくない話です。コニーは、およそ現代的で都会的、激しやすい反面、実は極めて「クール」で、西部劇には珍しい女性です。東部から来た「文明」をもたらす女性とも、もちろんローズ（アーリーン・ウィーラン）のような、典型的な「尽す女性」とも全く異なります。彼女は男性に対して独立性を主張します。しかし彼女を取り巻く世界は、女性が一人で男に伍して渡って行くのには厳しい世界です。この男性中心の世界で、如何に自分の我を通して生きるか。彼女はそれを実行しただけです。コニーは「悪」でしょうか。確かに、彼女に比べれば、アイヴィー（プレストン・フォスター）ですら、ただのわがままな男にしか見えません。西部劇にこのような女性は他に登場しません。その彼女に、デイブは最後に「おめでとう」を告げて去ります。何たる余韻でしょう。

ド・トスは彼の西部劇中六篇、つまり半数以上の作品をランドルフ・スコット主演で撮っています。その第一作が『馬上の男』です。よくあるレンジ・ウォー（牧場主間の闘い）の物語ですが、随所にひねりを利かしたなかなかの物語構成で、ド・トスの手堅い演出とも相まってなかなかの出来栄です。オーウェン・メリット（スコット）とローリー（ジョーン・レスリー）は互いに惹かれ合いながら、結局彼女は、近隣の牧場をすべて手に入れようと望む富裕な牧場主ウィル・イシャム（アレクサンダー・ノックス）と結婚します。イシャムは二人の仲が気がかりでならず、オーウェンの追い出しに掛かります。最後は結局、イシャムがオーウェンに屈し、牧場を売って去ることになります。しかしここで、オーウェンとローリーが結ばれるというありがちな結末は見事に避け

られます。彼女はあくまで夫に忠誠を尽し、共に去ると夫に告げるのです。イシャムは言います、「オーウエン、君は勝った。しかし私もだ」と。その後、イシャムは、オーウエンを撃とうとした自身の牧童頭ダッチャー（リチャード・ローバー）が放った銃弾を受けて息絶えるのですが、それでもローリーはイシャムに、牧場は売らないと誓うのです。ダッチャーを倒したオーウエンはというと、それまで彼を支えてくれた別の女性ナン（エレン・ドルー）と結ばれます。本作を平均点以上の作品にしているのが、この敵役イシャムの悪者なりの誠実さ、高潔さです。良質な西部劇の悪役はただの悪者では務まりません。

スコットは、気に入った監督には続けて監督の依頼をしました。本作のド・トスが素晴らしかったことの証拠と言えます。続く『西部のガンベルト』も佳作と言えます。スコット扮する鉄道会社のエンジニアが、鉄道延伸に反対する鉱山主の秘密を暴露します。その鉱山主は、他の鉱山から馬車で運び出される金塊を強奪していたのでした。

しかし、続く『叛逆の用心棒』、『平原の落雷』、『勇者の汚名』、『賞金を追う男』の四作は、可もなく、不可もなくといったところです。スコットが表向き賞金稼ぎ、実はピンカートン探偵社のエイジェントに扮するミステリー・タッチの最後の作などは、興味深い物語だと思われるのですが。

ド・トスは、スコットはもっと努力すれば良い俳優になれたのにと、不満を漏らしています。何しろ撮影の合間にはウォールストリート・ジャーナルを手にするような人です。またスコット作品は、ワーナーブラザース配給のものよりコロビアのものの方が良いと時に言われることがあります。前者では契約で仕事をこなしているだけですが、後者はスコット自身の制作（ハリー・ジョー・ブラウンと共同）だから、というのですがどうでしょう。ド・トスも、次第にその雰囲気の中で緊張感を失ってしまったのかもしれません。

スコット作以外の残りの作品を見てみましょう。『スプリングフィールド銃』はゲーリー・クーパー主演作品。ド・トス西部劇中、随一のA級作品です。北軍将校のクーパーが、頻発する軍馬強奪事件の内通者の探索のため、わざと軍籍を剥奪されて馬泥棒の仲間に加わり潜入捜査をするという珍しいスパイ物です。内通者の正体についてさほど意外性はありませんが、その邪悪さの描き方

が巧みです。緊張感に満ち、任務と家族の問題の間で揺れ動くクーバーの心理なども織り込まれた佳作と言えます。本作の主人公の活躍が軍情報局の創設の由来で、タイトルともなったスプリングフィールド銃の公式銃への採用の経緯も描かれるなど、歴史物の趣もあります。ただ、『真昼の決闘』公開直後の作品ということで、比較されると分が悪いのは否めません。

『廃墟の守備隊』は、反旗を翻したコマンチ族の襲来で壊滅した騎兵隊の生き残り隊員が、馱馬車の一行と共に廃墟となった砦に立てこもり、カイオワ族の少年の助けを借りながら窮地を脱するという物語。ハンフリー・ボガート主演の『サハラ戦車隊』(43)の西部劇へのリメイク版です。主演のプロデリック・クロフォードは、地味ながらも、時にB級作品では主役も務めた、やや太めのタフな西部の男を多く演じた俳優です。佐藤純彌監督の『人間の証明』(77)にも、警察署長の役で出演しています。

『赤い砦』は、カーク・ダグラスが、「自分の女のように愛する」西部のため、そしておそらくそれ以上に愛するスー族の族長の娘のために、スー族と騎兵隊との衝突を回避するべく孤軍奮闘します。これも早期の親インディアン作品の一つです。

『無法者の日』

【梗概】雪に覆われたワイオミングの町ピターズ。牧場主ブレイズ・スターレットは有刺鉄線で農地を囲い込もうとするハル・クレーンと対立。ブレイズはまた、クレーンの妻で元の恋人のヘレンとの過去に引きずられていた。二人の対立が一触即発となったその時、元軍人のジャック・ブルーンに率いられた七人の無法者の一団が現れ、町を支配下に置く。彼らは軍に追われていた。規律を重んじるブルーンに、元部下のショーティや若いジーンは忠実に従うが、テックスやペイスら他の者たちの間には不満がくすぶり始めていた。ブレイズは、ブルーンの胸の傷を手当てした獣医ランガーから、彼の命の長くないことを知る。彼が死ねば、ならず者たちが暴走し始めることは明らかだった。ブレイズはブルーンに、軍の追跡を避けて逃げる唯一の道は山越えの間道を通るしかないと告げて案内役を買って出る。しかし実は間道などなかった。ジーンはその

弟に親切にしたことから、町の女性アーニーと恋に落ちていた。ブルーから出発を命じられたジーンは、別れを告げに彼女の許を訪れ、間道の話をする。アーニーはそれが嘘だと言ってしまふ。ブルーはジーンから話を聞かすが、他の者には黙っているように命じて出発する。途中、テックスの馬が雪に足を取られて身動きできなくなると、ブルーはジーンに彼の馬をテックスに与えるよう命じ、一人町に引き返させる。ブルーが落馬し、駆け寄ったショーティと共にテックスに撃たれる。テックスはブレーズに先導を続けるよう命じるが、一人また一人と脱落し、テックスとペイスだけが残ると、ブレーズは姿をくらます。翌朝、ペイスは凍え死に、一人残ったテックスは、現れたブレーズに銃を向けようとするが力尽きて倒れる。生還したブレーズはジーンと再会し、彼を牧童として雇う。

．．．

よくある牧場主とホームステッダーの対立の物語、と思わせる始まりですが、両者の対立が沸点の状態にまで至った瞬間、一挙に物語は別の展開を見せます。極限まで張りつめた緊張感が一挙に冷却されるや否や、瞬時にして新たな緊張感が画面を支配するのです。それまでの、どちらが善でどちらが悪かという、観客の予測や期待を完全に裏切る、実に見事な展開の妙です。主人公の牧場主ブレーズ・スターレット役にロバート・ライアンという配役が絶妙です。多く悪玉を演じながら、時に善玉も演じるライアンという俳優は、容易にはその役割を予測させません。ブレーズは有刺鉄線を忌み嫌う牧場主。多くの西部劇ではそれは敵役を意味します。登場場面の雰囲気自体が悪役然としています。彼と対立するハル・クレイン役のアラン・マーシャルはかなり格下の俳優と言ってよいでしょう。確かにこの二人の対立だけで事は済みそうにない気配が濃厚です。そこにパール・アイヴス演じるジャック・ブルーの登場です。彼の存在感は圧倒的です。ただ巨体だからというだけではありません。カントリー歌手でもある彼の声は、実によく響く美しさを持っていますが、十分に威圧的でもあります。ライアンとアイヴスの見事な対峙、バッド・グッドマンとグッド・バッドマンの交錯、そして意気に感じた男同士の阿吽の呼吸、本作の魅力はそこにあります。ある意味で、一つの友情の物語であり、二人の「悪者」がその

ぶつかり合いによって、どちらもグッドマンに立ち返る物語でもあります。やはりド・トスは入念に「悪」を描かせると、実に水際立ちます。

3. ガード・オズワルド **Gerd Oswald** (1919-89)

1919年6月9日、ドイツ、ベルリン生まれ。父リヒャルトも映画監督でした。ドイツ語ではゲルト・オスヴァルトでしょうか。早くから父の影響で映画界入り、ナチスから逃れて、オーストリア、イギリス、フランス、オランダで父の助手を務めます。38年、アメリカに渡り、父や他の監督の助手を務めます。当初はモノグラムで、40年代後半にはパラマウントに移り、ビリー・ワイルダー監督などの助手を務めています。50年代には20世紀フォックスに移り、ヘンリー・ハサウェイ監督の『砂漠の鬼将軍』(51)や『ナイアガラ』(53)などで助監督を務めます。しばしばドイツ系の監督に、あるいはドイツ関係の作品にしばしば起用されたのも、当然と言えば当然でしょうか。最初の監督作品は55年のテレビ版『牛泥棒』、映画では翌年の『赤い崖』になります。その後も、テレビの仕事を中心に活動を続けます。映画では、後述の西部劇作品やバーブラ・スタンウィック主演のフィルム・ノワール『クライム・オブ・パッション』(57)やドイツ制作の『ブレインワッシュド』(60)などの他、『史上最大の作戦』(62)では、クレジットはありませんが、作品中でも印象的なパラシュート場面のエピソードの監督を担当しているようです。他方、テレビの方では、「ペリー・メイソン」、「アウター・リミッツ」、「スター・トレック」などのシリーズ物を手掛けています。映画での最後の監督作品は、ベティ・デイヴィス主演のコメディ『バニー・オヘア』(71)です。彼が映画界に残した作品は十二作に過ぎません。89年5月22日、ロサンジェルスで亡くなります。なお、オズワルドに関してはまとまった文献資料がなく、以上は種々の資料やデータからの類推によってまとめたものです。

オズワルドの西部劇は、『荒野の宿敵』*The Brass Legend* (ユナイテッド・アーティスツ 56)、『ショウダウンの怒り』*Fury at Showdown* (同 57)、『ヴァレリー』*Valerie* (同 57) の三本です。

『荒野の宿敵』は律儀で一本気な保安官と彼を慕う少年との交流と友情を描

く物語。クレイ少年（ドナルド・マクドナルド）は、手配書で見たお尋ね者トリス・ハットン（レイモンド・バー）が恋人の家に向かうのを見て、親しくしている保安官のウェイド・アダムズ（ヒュー・オブライアン）に通報します。ウェイドは、少年が危険にさらされないよう、見たことを秘密にするよう諭した後に、ハットンを逮捕します。しかし少年の父は、彼の帰りが遅かったことをいぶかり、事実を問い質して事実を知り、ウェイドに懸賞金の支払いを求めます。新聞は、ウェイドの反対を無視して少年の手柄を称える記事を書き、少年の姉で恋人のリンダ（ナンシー・ゲイツ）も彼を非難します。失望感を覚えたウェイドは辞職を考えます。そこへクレイ少年が狙撃される事件が起こります。ウェイドの危惧は的中しました。ハットンの仲間が報復に撃ったのでした。ウェイドは犯人一味を追って二人を倒し、一人を捕まえますが、その男は隠し持った銃を牢獄のハットンに委ねて報復を依頼します。最後は二人の対決で物語は決着します。

原題 *Brass Legend* の brass は真鍮のことですが、まずは保安官バッジを指しているように取れます。またこの語には「頑固」といった含意もあるようですので、「頑固者の伝説」といったニュアンスが込められているのかもしれませんが。もちろん主人公の性格を暗示するものです。律儀で思慮深い保安官ウェイドを演じるオブライアンは、専ら二番手、三番手として幾つもの西部劇に出演していましたが、55年に始まったテレビシリーズ「保安官ワイアット・アープ」の主演で一躍有名になります。本作での主役起用は、その人気にあやかっただけでしょうか。保安官と悪漢との対決という構図自体特に目新しいところはないかもしれませんが。しかし、手柄を一人占めにしようとしたかの如く非難されても言い訳をせず、己の信念を貫こうとする主人公の義侠心と少年を気遣うやさしさ、そしてその彼の気持ちを、ただ一人、痛いほどよく分かっているクレイ少年の切ない思いが胸を打ちます。なお、クレイ少年役のマクドナルドは、ターナー監督の『硝煙』のゲーリー少年も演じています。

『ショウダウンの怒り』

【梗概】 ブロック・ミッチェルは刑期を終えて釈放される。久しぶりに戻った

故郷のショウダウン・クリークでは、弟のトレイシーが牧場を守って待っていた。一方、町の法律家チャド・ディージーは、ブロックが殺し屋だという風評を町に広めていた。実はディージーの弟がある若者を殺し、ブロックにも銃を向けたためやむなく彼の弟を撃ったのだった。保安官の娘で元の恋人のジニーと出会う。彼女をエスコートしていた青年トムは、彼の姿を見て恐れをなす。ブロックとトレイシーは、他の牧場主と共同して近隣に建設される鉄道事業に食肉供与する契約を鉄道業の代理人フェルプスと交わす予定で、彼の到着を待っていた。兄弟の牧場の銀行への債務返済の期限が三日後に迫っていた。銀行家のヴァン・ステューデンは期限を延ばしても良いと考えていたが、そのためには権限を有するディージーの了承が必要だった。駅馬車が到着したが、フェルプスは乗車していなかった。酒場で、ブロックはディージーの護衛のサットンの挑発を受け、またトムが、ジニーとはもう合わないと弁明して、一層彼を苛立たせる。翌朝、トムが町を逃げ出したと彼の母がブロックを非難、ジニーや町中の人々が彼を避けるようになる。フェルプスはやはり訪れない。ディージーは、返済期限の延長を認める代わりに町を去るようブロックに迫り、断った彼とサットンの間で緊張が走るが、持っていた銃を窓から放り出してその場を切り抜ける。ブロックはもめ事を避けるため銃を保安官に預ける。翌日、ブロックはトムの母に会い、彼を脅してはいないと釈明すると、彼女は借金のあるディージーに強要されていたと告白する。フェルプスの様子を尋ねに、トレイシーを隣町に送ることになる。実はフェルプスはそこで待つようにという手紙をディージーから受け取っていたことが分かる。急いでショウダウンに戻る途中、待ち受けていたサットンにトレイシーは撃たれるが、致命傷を負いながらも帰り着くと、いきさつを話してこと切れる。サットンにはディージーに、トレイシー殺害を告げ、逃げると言って報酬を要求。恐慌をきたして引き留めようとする彼を殴り倒して逃走を図り、保安官らと銃撃戦となり、保安官補が撃たれる。ジニーを人質に取ったサットンにディージーが追いつがり、揉み合いになった隙を突き、ブロックは保安官補の銃を拾い上げてサットンを撃つ。ブロックとジニーは見つめ合う。

．．．

わずか五日間で撮られたという「B級」の真髓のような作品です。B級映画は若手監督の修練の場とよく言われますが、遅れて来た若手であるオズワルドにとっては、何の造作もないことのように見えます。随所で見える俳優の立ち位置や所作の絵柄としての美しさ。能楽や古典演劇の舞台さえ思わせる様式美と評すると誉めすぎでしょうか。彼の最上の作品であるというだけでない、それ以上の評価を得るに足る作品と言って良いと思われます。名のある俳優と言えば、主演のブロックを演じるジョン・デレクぐらい。他は、弟トレイシー役のニック・アダムスが我が国で『怪獣大作戦』（65）などのゴジラ物に出演することで知られる程度で、主にテレビで活躍した俳優陣と言えます。しかし経験を重ねたB級俳優の底力とそれを引き出したオズワルドのタイトな演出力が見事のひとつです。原作のルカス・トッドも、脚本のジェイソン・ジェイムズも知られた作家ではないようですが、その名を記しておきましょう。見事なモノクロ画面の撮影は、名手ジョゼフ・ラシエル、オットー・プレミンジャー監督の『ローラ殺人事件』（44）でアカデミー賞を受賞している撮影監督です。

本作がナチズムやマッカーシズムへの暗喩であることは間違いないでしょう（Sarris, p.135）。ブロックは自身の過去を反省し、二度と銃を取らない決意を持って故郷に帰ります。しかし彼を憎む弁護士ディージー（ゲイジ・クラーク）は彼を貶める宣伝や作為的な演出まで行います。そのため、彼をよく知らない者はもちろん、彼をよく知るはずの恋人やその父の保安官なども彼を忌避するようになり、そして多くの者は、見て見ぬふりを決め込みます。ここにはユダヤ人や「反愛国者」を弾圧した体制、そしてそれを「支持」した社会への、ポピュリズムの危うさへの警鐘が込められているように思えてなりません。しかし中にはわずかではあっても彼を信じる人もいます。銀行家のスティーデン（シドニー・スミス）だけは何とか彼のためにと一肌脱ぐのです。もちろん、ディージーへの反感という動機もあるのですが、おそらくブロックのことをその父の代から良く知っていたからなのでしょう。

『ヴァレリー』は珍しい法廷物で、牧場主（スターリング・ヘイドン）が妻（アニタ・エクバーグ）の両親を殺害し、彼女にも重傷を負わせた事件の裁判の様

子が描かれます。事件や、そこに至る経緯について二人の証言は食い違いますが、最後は妻が夫から暴力を受けていた証拠（葉巻を押しつけられて出来た火傷の痕）が示されて夫の嘘がばれる、というものです。最後に、夫の部下が側に置かれた銃を彼に渡し、苦し紛れに妻を人質に取って逃げようとするといった、現代の法廷ではまず起こり得ない展開さえなければ、特に西部劇である必然性はほとんど無いかもしれません。開巻早々、ヘイドンが両親の家に押し入ると、すぐに銃声が聞こえます。ドアが開かれ、中の様子が映し出されると、床には両親の死体が転がり、ソファーにはエクバークが倒れています。オズワルドの見事な演出による緊張感たっぷりの冒頭場面です。夫が犯人のようだが、しかし何かあるに違いない、そう考えさせる見事な始まりです。しかし結局、その見た通りのままなのでした。タイトなオズワルドの演出が光る作品ですが、それが無ければ、そしてヘイドンの演技と存在感が無ければ、とても持たないようなお話です。後にフェデリコ・フェリーニの『甘い生活』（60年）で「女」を上げるエクバークの西部劇という点もファンには貴重と言えます。食い違う証言というテーマには、黒澤明の『羅生門』（50）の影響が明らかですが、結末の余韻は全く別物です。

しかし様々なことを考えさせてくれる作品であることも確かです。おそらくドメスティック・ヴァイオレンスという問題を、これほど真正面に描いた西部劇は（他のジャンルを含めても）初めてではないでしょうか。西部の荒々しさの中では、暴力は日常茶飯事で、女性や子供ですらその対象になります。もちろん基本的にはそういった暴力をふるう者が悪者なのですが、ヒーローですら、例えばジョン・ウェインが演じる場合など特にそれを感じますが、現代アメリカならまず裁判沙汰になること請け合いのような女性「蔑視」的な態度を取ることしばしばです。多くの場合は、照れ隠し、気恥ずかしさの裏返しといった弁護が可能ではあるのでしょうか。

ここでも、表向きは取り繕い、陰では残忍な虐殺を行っていたナチズムへの批判が込められているのは間違いないと思われます。そして暴力的な夫の役にヘイドンが選ばれたというのも意味深長です。彼は、非米活動調査委員会において、「友好的に」証言をした一人です。後年、彼は自伝でそれを悔いること

になるのですが、本作はその彼に対する揶揄と見ることもできそうです。ハリウッドではこの手のことが時折行われています。しかし彼と例えばオズワルドの間に特に何か揉め事が起こったということはないと思います。二人は他の作品でも共に仕事をしています。

オズワルドの西部劇はいずれもB級西部劇のお手本のようなようです。彼がA級になることなくテレビ界に重心を移したことは、ハリウッドにとって損失だったと思います。しかしそれはそれで良かったのかもしれませんが。だからこそ達成できるものが確かにあるのです。

終わりに

以上、ターナー、ド・トス、オズワルドの三人の監督を取り上げ、その作品等について概説を試みました。ヨーロッパからアメリカを見る、アメリカを「創造する」という観点での今後の研究の基礎となるようにして行きたいと考えています。

参考文献

- Buscombe, Edward (ed.). *The BFI Companion to the Western*. London: Andre Deutsch / BFI Publishing, 1988.
- De Toth, André. *Fragments: Portraits from the Inside*. London: Faber and Faber, 1994.
- De Toth, André. *De Toth on De Toth: Putting the Drama in Front of the Camera, a Conversation with Anthony Slide*. London: Faber and Faber, 1996.
- Fagen, Herb. *The Encyclopedia of Westerns*. New York: Checkmark Books, 2003.
- Fujiwara, Chris. *Jacques Tourneur: Cinema of Nightfall*, Jefferson (NC), McFarland, 1998.
- Hardy, Phil (ed.): *The Overlook Film Encyclopedia. The Western*, 2nd edition, Overlook Press, 1991.
- Hoffmann, Henryk. *"A" Western Filmmakers: A Biographical Dictionary of Writers, Directors, Cinematographers, Composers, Actors and Actresses*. Jefferson (NC):

McFarland, 2000.

Langman, Larry. *Destination Hollywood: The Influence of Europeans on American Filmmaking*. Jefferson (NC): McFarland, 2000.

Nott, Robert. *Last of the Cowboy Heroes: The Westerns of Randolph Scott, Joel McCrea, and Audie Murphy*. Jefferson (NC): McFarland, 2000.

Nott, Robert. *The Films of Randolph Scott*. Jefferson (NC): McFarland, 2004.

Sarris, Andrew. *The American Cinema*. New York: Da Capo Press, 1996 (1st edition: 1968).

Wilson, Michael Henry. *Jacques Tourneur ou la magie de la suggestion*, Paris, Centre Pompidou, 2003.

吉田広明『西部劇史』作品社 2018 年

. . .

AFI. www.afi.com, American Film Institute.

Film portal.de. www.filmportal.de.

Internet Movie Database. www.imdb.com, IMDb.com, Inc.

Kinenote. www.kinenote.com, キネマ旬報社

TCM Movie Database. www.tcm.com, Turner Classic Movies.